

オランダにおける都市デザインに関する研究書の刊行

北尾 靖 雅*

The Publication Project on Urban Design, in the Netherlands

Yasumasa Kitao

■オランダでの出版

2005年夏、ようやく永い念願が叶った。それは、ヨーロッパからデザインプロセスに関する研究書を出版することであった。その対象は日本ではあまり知られていないアーバンデザインの分野である。

私は2001年から2002年にかけて、文化庁の支援を受けて、アーバンデザインの専門家としてオランダのデルフト工科大学に上席研究員として赴任する機会を得た。幸運なことに、デルフト工科大学に在職中、私が東京大学に提出した学位論文が評価され、ヨーロッパから刊行することが2001年の冬に決まった。デルフト工科大学の都市計画学科（当時の都市再生学科）を基盤としてデルフト工科大学出版局の事業として始まった。その後、5年に及ぶ出版の長い道のりが始まった。



図1 デルフト工科大学建築学部

本の題名は“Collective Urban Design : Shaping the City as a Collaborative Process”である。東京大学での博士論文を土台としてデルフト工科大学で加筆・編集した。そのような仕事を手がけている最中に原典の論文は2002年に日本都市計画学会賞を受賞した。このことがオランダでの出版プロジェクトを加速させた。

■デルフト工科大学

オランダは都市計画の先進国です。ラインの河口に位置し、ヨーロッパの貨物の集積地として重要な役割を担っている。化学工業を主軸とする工業を発達させた。また国際貢献にも多くの国家予算が使われてきた。国際平和司法裁判所などの国際機関も集中している。中立的な政治的風土を活かした国づくりがすすめられてきた。国土を低湿地から作り出してきた歴史を持つ社会では、水との戦いの中から人々が協力しあい、共生というテーマにおいて課題を克服してきた。ここに私が学ぶ対象の協働設計の概念がオランダにうまれた背景を見ることができる。その背景には基督教で言うところの「黄金の調和」（エラスムス）がある。この概念は仏教文化でいうところの「寛容の精神」である。こうした社会風土がある国で都市デザインにおける寛容なるものの研究を展開したのである。しかしグローバル化のなか、こうした寛容の社会風土の是非を巡ってオランダ人々のアイデンティティは近年変化してきたともいわれている。

*本学助教授

デルフト工科大学はオランダの中でランドシュタットとよばれる工業地域にある中規模程度の都市デルフトにあり、デルフトはオランダがスペインに対して独立戦争を開始した記念すべき都市でもある。日本と交易を行ったオランダ領東インド会社の本社もこの町にあった。デルフト焼（陶磁器）で知られるこの町に工科大学が設立されたのが、今から160年前のことである。特に化学、環境技術、水利土木、都市計画において高度な研究教育を実施している。全学の人口は、3万人ともいわれている。建築学部だけでも3000人の学生が学び、約500人の教官が研究教育を行っている。

オランダは近年、建築デザインと都市計画において注目を集めている。デザインの新奇さだけでなく、その背後にあるオランダ社会の国際化を見ることができる。そうした社会風土を反映するようにデルフト工科大学では教育の国際化が進んでいる。その建築教育の中でアーバンイズム（アーバンデザイン）は国際的な連携を担う科目であると位置づけられている。アーバンデザインは建築設計を学んだ学生がさらに高度な能力を身に付けるための教育分野として位置づけられている。この分野を軸に、世界の大学との連携を進めており、建築設計教育を補強するための科目として重視されている。

こうした学術風土のなかアーバンデザインを議論し深めてゆく機会に恵まれた。

■図書の内容

本書は日本におけるアーバンデザインの実例をもとにアーバンデザインの理論を記述したものである。複数の建築家やランドスケープアーキテクトなどの設計者が集合して集团的に建築物の集合体を設計する方法を解説するものである。本書で扱うマスターアーキテクト方式とは都市デザインの目標像を設定して、その目標に向かって設計に参加する設計者が力を合わせて問題を解決して行く方法である。そこではそれぞれに異なった動機や意図を持つ設計者が集まり、協力関係を保ちながら設計をすすめてゆく設計方法のことである。

しかし、自己をもつ建築家が他の建築家とともに設計を進め、それが一つの建築集合体を設計し

てゆくことはきわめて社会的であり、多くの困難が伴うことは十分に予測できる。しかし、建築家がこの難問に挑戦するという事は、今後の環境重視の社会に必要なCOLLABORATIONという重要な課題にどのように対処するのかということ、今後十分に検討する必要があるからである。

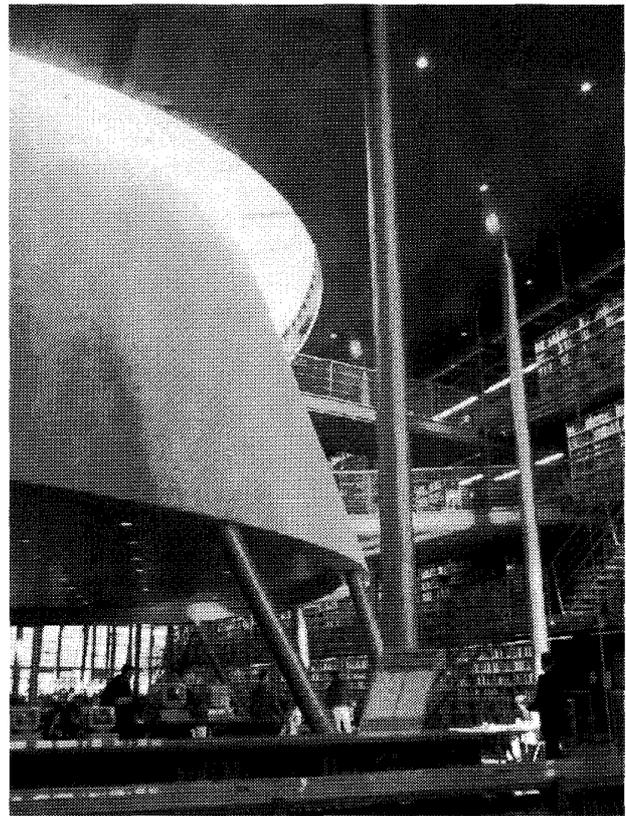


図2 デルフト工科大学出版会のある、工科大学図書館の内部

■建築集合体

そもそも建築物の集合体を建設する事、すなわち都市を計画的に設計することは、人類の文化の歴史とともに発展してきた。その歴史から大まかにみてゆくと、古代では農耕技術を応用することが建築物を集合させる事に用いられた。これが都市計画の起源と考えられている。また、軍事的な必要性（露営術）と関連したとも考えられている。軍隊が遠征地で駐屯する場合にその兵営を造ることが必要だったのである。ギリシャ社会ではく全体に対して協力し合う個々といわれる世界観が芽生え、その概念を表す都市が建設された。ミレトスの都市計画に見られる格子型の街路網はこうした概念を反映したものだと考えられている。中世

には工匠建築家、マイスター、修道士などが関与して都市を造り上げていった。近世・近代を通じて、官僚システムと法律などの手段を用いて都市形成が進められた。近代以降はこうした方法は継続している。その一方で民主主義的社会的展開や資本主義の発展に伴い、建築物や外部空間の設計者同士の対話のプロセスによって建築物の集合体を設計する方法が世界に展開してきた。設計者が組織を形成して、都市を設計するのである。民主主義的な社会を都市計画的に建築的に実現する方法であると考えられる。現在は、都市間の競争が熾烈になる中、都市のもつイメージ力を喚起するために、世界中から建築家を招聘し、都市の個性を高めるために、協働設計、すなわちマスターアーキテクト方式が採用されている。

■マスターアーキテクト方式

このようにマスターアーキテクト方式は、現代のグローバル化する社会において、都市の経済と都市景観、環境形成など様々な課題に対応する方法となってきている。では、設計者が設計のチーム（組織）を形成するとはどのようなことであるのだろうか。「組織」とは「第一義的に目標を達成させるため多少とも計画的に考案された協動的活動をともなう人間の社会的行為の単位」と定義されている。組織では「協働」が必要となる。バーナードによれば、「協働」とは「ひとりではできない仕事を複数の諸個人が協力して達成する過程をさす概念」であり、一人では運べない大きな石を何人かが協力して運搬する例を示す。組織は元々諸個人の協働（Collaboration）から発生すると考えられている。

一方、「協働」は近代建築運動の一つの目標であった。例えばCIAMの結成（1928年）でル・コルビジェらは活動を話し合い、その「会議」という名称は「一緒に働く」という意味で採用された。「会議」は協働の会議となるはずのもので、各人が各自の特定の分野を報告するような会議は意図されず、建築家同士の協力が確認された。建築家達はその協力関係によって都市問題に取り組む姿勢を示した。「協働」が具体化するのには第二次世界大戦後である。荒廃した社会復興のために

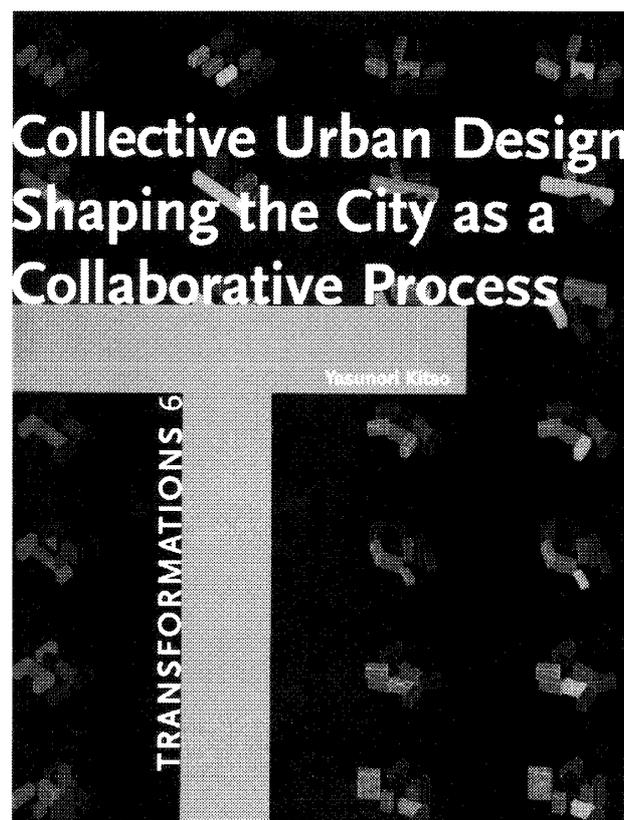


図3 図書の表紙

建築家の協力を呼びかけたのがW・グロピウスである。1946年のTAC（建築家協働集団）の宣言で、「協働」の重要性を打ち出した。

本書では「協働」による設計の対象を建築物が集合する一つの全体を考えると、「複数設計者が参加して、一つのまとまりのある建築物の集合体を設計するための方法とそれを含むプロセス」を「協働設計方式」（Collaborative Design Method）とよんでいる。

本書ではマスターアーキテクト方式（MA方式）と呼ばれている設計方法を中心に論述していった。この設計方法は日本では、フランスの都市計画方法を参照して、多摩ニュータウン南大沢15住区に始まった。滋賀県立大学、阪南スカイタウン、さいたま新都心の設計に導入された。いずれも同一の建築家（内井昭蔵）が関与したものである。内井は過去約40年間にわたり建築の設計経験がある。本研究で分析対象とした4事例を詳細に考察する事でMA方式に関してその理解を深めていった。

■設計方法論

設計方法研究には設計条件、設計等の固有性から、同じ条件で同じ設計プロセスが繰り返し行われないことやMA方式は大規模な都市設計なので研究対象の事例は限定される。さらにMA方式を運用するMAの資質、個性、能力の相違やMA方式に参加する建築家・設計者、事業者の違いによって設計結果が影響を受ける。これらは設計方法研究の必然的に生じる限界である。本書ではこうした条件から影響を受けない設計プロセスの構造に着目し具体的な事例をもとに以下の構成で議論を進めていった。

本書は特に「都市の中の都市」とよばれるスケールの建築集合体の設計方法に限定した研究を展開した成果である。しかし設計に必要と考えられる建築設計者（ブロックアーキテクト、以下、BA）同士の連携、調整者の立場・役割などのあり方が未だ明らかになっていないので、本書では以下の議論を展開し協働による都市設計の方法をまとめた。

■本書の構成

本書は三部構成となっている。第一部では、マスターアーキテクト方式の背景と事例をまとめた。第二部では大規模都市開発におけるMA方式での設計の連携と調整を、阪南スカイタウン、南大沢15住区、大宮新都心の事例を用いて紹介した。第二部では、大学キャンパス計画におけるMA方式を用いて、設計の展開を扱った。そして第三部では、MA方式による設計方法をまとめた。そして本の内容を総括すると同時に、今後どのようにMA方式を展開できるのかに関して議論を進めていった。

■本書の国際的な可能性

この本では、国際化する都市の状況や環境問題が深刻化する状況において専門家の協働が重要であることを示した。建築集合体を集団で設計するという事は、近代以降の新しい課題分野であり、都市と建築をつなぐ境界領域を対象に設計方法の観点から論じた世界初の学術的な成果である。マスターアーキテクト方式により可能な多様と秩序

をあわせもつ混在型の都市設計は「都市と建築の永遠の課題」といわれるが、この課題に応えるのが本書である。

日本においてマスターアーキテクト方式の発展は、公営住宅の住環境を改善するという課題と結びついていた。日本の住宅の大勢は戦後の期間、均一な住環境だった。そこで住環境問題を解決するためにアーバンデザインの方法を取り入れはじめた。概して、都市景観に対して西洋の建築家ほど注意を払っていないと言われていたので、日本の建築家が都市景観を積極的に形成したことは大きな出来事だった。今後の良好なまちづくりにや京都のような歴史都市における景観形成のために設計調整者の必要性は高く認められてきている。

この図書では設計プロセスの現場から、設計調整方法に関する多くの知見を展開している。設計方法の研究はこれまで一人の建築家の設計思考を捉えてきたが、この論文では複数の建築家の設計思考を同時に捉え、しかもそれが創作論として実に具体的にまとめられている。ここにこの図書の価値があると言われています。これは設計方法研究の新しい地平を切り開くもので、フィールドワークを基本としてその中で発見できたことを、論理的に再構成する手法による成果であると評価されています。これは、実際の設計に有益な知見を獲得する事を研究目的の一つにあげて進んでいった結果です。こうした設計プロセスの技術的発見に基づき、設計方法として展開している点がヨーロッパで高く評価をうけた理由であります。

従って、この図書に示された成果は、今後の都市設計の現場に、有益な知見を提供できる可能性が高い。今後の環境問題に建築家の協働が必要な将来の都市設計・建築設計の両分野にわたって、建築学が対応するための社会的な価値があると考えられている。

特に、都市開発が急速に進展するアジアにおいては、建築や都市の設計に重要な視点を提供するものであるという評価を受けている。日本の具体的な都市と建築の設計方法を記述した本はアジアには存在していない。また、この本で紹介されているアーバンデザインに関わる内容は日本と同様にアジアではあまり知られておらず、アジアの

人々と共有することが望ましい内容である。アーバンデザインの考えは、主としてヨーロッパで芽生えたといえます。それが近代化のなかで日本で理解され独自に発展していきました。

この概念を都市設計の先進国のオランダで発表したことをアジアにひきつぎ、ひろく東洋と西洋の建築・都市文化を融合してゆくことが私のねら

いです。現在、こうした学術交流は韓国に波及し韓国の研究者とのあいだで、協働設計に関する共同研究へと展開しています。多くの都市開発事業が展開するアジアにおいて、日本で開発されたアーバンデザインの概念や方法を媒介として国際的な学術交流の展開に寄与してゆくことの土台がデルフト工科大学でできたといえます。